

### 3. 南山城のカンジョウナワ行事（Ⅱ）

技師 横出洋二

#### 1. はじめに

カンジョウナワは年頭に神社や集落の口に張られる太縄で、細縄や樹木の枝・農具の雛型などを下げたり、護符・御幣を挿したりする。関東方面他にもあるが、全国的に近畿地方に特徴的に見られる。南山城地方でもこの行事は行われており、すでに当館報第3号の調査報告「南山城のカンジョウナワ行事」<sup>(註1)</sup>で報告している。

この報告に掲載された表「山城のカンジョウナワ」では、廃絶を含め21例の山城地方のカンジョウナワを掲げている。この内現行としてあげているのが12例で、本文では8箇所のカンジョウナワの調査報告を行なった。しかし、その後相楽郡の東部や乙訓郡の市町村でも新たにカンジョウナワが行なわれていることが当館の調査や市史関連の調査でわかってきた（別表参照）。そこで今回は京都市内を含め、前回報告されなかったカンジョウナワとそれに付随した行事を報告する。

#### 2. 各地の事例

##### A. 野殿カンジョウナワ

カンジョウナワ 南山城村野殿では1月15日に氏神の六所神社に掛けられる。野殿は戸数約40軒で、全戸六所神社の氏子である。1月4日に氏子の当主が地区の農業倉庫に各自粳米の稲藁を持って集まり、カンジョウナワを作る。

作業は手分けして行う。まず藁を叩いて柔らかくし、手でシビをそぎ、ある程度たまったらなっていく。藁2束を藁縄でくくり、縄の端を倉庫の適当な柱にくくる。2人が1束ずつ持ち右にねじり、そして両束を左ないに絡ませて1本にする。他の者が藁を継ぎ足しながら同様の方法でない1本の長い太縄にしていく。

また太縄の他にも縄に下げるエト・ナベツカミ・ナベシキ・ミ・タワラを模したものを藁で作る。エトはその年の干支の動物、ナベツカミは調理のとき熱い鍋をつかむもので箒の先のような形をしている。ナベシキはクドで蒸し物をするときセイロの下に敷くものである。ミは箕、タワラは米俵である。米俵は中にスリヌカをつめた小さいもので、本物同様にコモアミを使って編む。

大般若経転読 太縄と下げ物が完成すると、カンジョウナワは福常寺本堂に置かれ、同月11日に同寺を兼務している同村大河原の春光寺住職によって大般若経転読による祈祷がなされる。そして15日の朝トラックで神社に運び、参道口に道をはさんで立つ2本の杉の木の間には張る。3mほどの木の間には補強にロープが張られそれに巻き付けるように張る。次にナベツカミを右端にタワラ・エト・ナベシキ・ミを吊り下げる。ナベツカミ・タワラ・エト・ナベシキの各間に1つずつ藁を束ねた下がりも掛ける。張った後は特に儀礼はなく翌年の1月15日の掛け直しまで張っておく。

カンジョウナワは、昔はワカシユウが作ったといい、10年ほど中断した後、10年前に復活した。縄の材料は餅藁で、3つ編みの太いものだったという。

##### B. 有市のオシメナワと山の神行事

年寄講 笠置町下有市には年寄講と五人衆という座的な年令集団がある。年寄講は長老組織で、その下に五人衆があり、その年長者を太夫<sup>タユウ</sup>という。太夫は12月8日の太夫成りをへて就任する。この日年寄講と一緒に7カ所の祭祀場に参拝してから太夫宅で年寄講の人々を饗応する。太夫は1年間地区内にある祠の掃除や献花・献灯を行なう。祭祀場は山の神社（2カ所）・愛宕社・住吉社・稻荷社

表 山城地方のカンジョウナワ

所在地	場所	行事日	組織	下げ物
南山城村野殿	六所神社	1、15	氏子	エト・ナベツカ ミ・ナベシキ・ ミ・タワラ
笠置町下有市	山の神	1、4	年寄講	ツゲ枝
同 飛鳥路	布目川	1、7	区民	ケサ・男根・女 陰・鋤・鍬・ 鎌・サントク・ 御幣
和東町白栖	ムラ入口	1、9	区民	御幣
加茂町銭司	春日神社	1、4	区民	藁網・米袋・榊・御幣
同 井平尾	浜道	1、5	堂ノ講	弓矢・榊の葉・松葉
木津町鹿背山	ムラ入口	1、4	出垣内町	榊・御幣
精華町山田	新殿神社	1、8	南座北座	御幣
同 菅井	天王神社	1、4	八日座	矢・榎の葉
山城町平尾	涌出宮	2、16	歩射座	男根・弓矢・ニツキの葉
同 綺田	綺原神社	2、15	古川座	弓矢・榎の葉
京田辺市宮津	佐牙神社	1、5	山本宮座 江津区民	矢
城陽市観音堂	巨椋神社	10、1	区民	御幣・イモ
宇治田原町荒木	ムラ入口	1、8	堂衆座	榊の葉
同 岩山	ムラ入口	1、8	宮座	御幣
同 禅定寺	ムラ入口	1、8	区民	榊
同 糠塚	ムラ入口	2、8	区民	榎の葉
長岡京市奥海印寺	走田神社	1、10	地区役員	榊・御幣
同 勝竜寺	勝龍寺 春日神社	1月第2 日曜	区民	榎の葉
京都市竹田	ムラ入口	1、8	旧丈六町	祈禱札・榎の葉・御幣
同 小山	ムラ入口	2、9	区民	松葉・御幣
同 大原	谷入口	1、10	特定家筋	榎の葉
同 大原	ムラ入口	3、10	特定家筋	榎の葉

(別称アオモリさん)・クサガミさん・ゴシヤノモリである。愛宕社は鳥居と石灯籠、ゴシヤノモリは鳥居と簡易な拜殿のみで祠はない。他は鳥居と小さな祠がある。

オシメナワ 下有市ではカンジョウナワをオシメナワと呼んでいる。1月4日に太夫宅に年寄講の人々が集まり2本のオシメナワを作る。

まず、3束の藁をひもで束ね、ひもを屋外の建物の柱や木などにくくる。そして藁を3等分し3人が握って右縄にひねり、次に各束を合わせて左縄になる。同様に藁を足しながらなって直径10cm・長さ4mの1本の太綱にする。綱が出来ると半紙を綱全体に巻き水引で止める。

完成すると、山の神に持って行って吊す。最初西の山の神社に行き、祠の後にある2本の杉の木の間で吊し、鉤になった12本のツゲの木の枝を掛ける(閏年は13本)。そして祠を拜んでから東の山の神に行き、同様に祠の横の杉の木に掛ける。ただしここにはツゲの枝は掛けない。東のオシメナワは昭和30年頃まで細い縄だったが、西との釣合いを考えて同じものにしたという。

山の神行事 オシメナワを掛けた翌日に子供が山の神行事を行なう。集落は東西に大きく分かれており、東の集落は東の山の神で、西の集落は西の山の神で行なう。地区は6つの村組に分かれているが、行事の組分けは特にそれに対応していない。

早朝に男の子が集まって各家を1軒づつまわり、1合づつ米を集める。そして祠の前に携帯用の簡易なかまどでご飯を炊く。炊き上ると13本の竹の矢を中央に突き刺す。矢は長さ10cmほどに切ったシノブ竹に紙の羽を付け、半紙で13本を一つに束ねて水引でくくったものである。刺した後は矢と一緒にご飯を山の神に供え、米寄せした各家にもご飯を配ってまわる。昔は、子供は1日山の神のまわりで遊んだという。また矢とご飯をすくう杉のし

やもじは、オシメナワ作りのとき年寄講が作っておいたものである。

### C、飛鳥路のカンジョウナワとオニフウジ

カンジョウナワ 笠置町飛鳥路では1月7日に氏神の天照御門神社に地区の人が集まってカンジョウナワを作り、布目川の兩岸の木に張り渡す。

当日は朝8時頃各家から藁10束を持寄り、太縄と細縄、そして太縄に下げる作り物を分担して作る。太縄は藁をある程度の太さに束ねてひもでくくり、境内の舞台天井にあるわっかにひもを通して1人が持つ。そして藁束を3等分し、3人が握って右縄にひねり、次に各束を合わせて左縄にない、藁を足しながら同様になって1本の綱にする。直径約120cmの円を16巻きするのを目安としている。

作り物はサントク・ナベツカミ・男女の象徴物とケサ1対を藁で作る。サントクは火鉢の中で鉄瓶や鍋などを乗せる鉄輪で、わっかに3本の足を付けた形である。鍋つかみは熱い鉄鍋を持つものである。女性の象徴は藁を丸く束ねて藁ひもで十字にくくったもの、男性の象徴は藁を筒型に束ねて3箇所ひもでくくったものである。ケサは細ひもで水引のように結んだものである（水引か）。他にも宮守が木で鋤・鍬・鎌の模造品を作る。細縄も掛ける川幅の長さ分ない、縄に間隔をおいて幣をつけていく。

昼前には完成し、トラックで集落の西を流れる布目川まで運び、木に張り渡す。川は奈良県山辺郡都祁村方面から北に流れ、飛鳥路地区の北西端で木津川に合流する。地区の伝承では北西に流れる川は村の財産を持って行くのでそれを防ぐためカンジョウナワを張るという。

川には中州があり、カシの大木が立っている。太縄のカンジョウナワは川の左岸のカシの木と中州のカシの木、細縄は右岸の木と中州のカシの木に張り渡す。作り物は、太縄の一端を左岸の木にくくって川を渡した時にケ

サを左右にくくってその間に他の作り物を下げ、中央に御幣をさす。それから中州のカシに登って引っ張って伸ばし、木にくくる。

張り終わると、中州のカシの木に集まり、宮守が木の根元にお神酒・鯛（2尾）・塩・飯を供え、そしてお神酒を撒いてから拜む。この後、解散して行事は終わる。

オニフウジ 神社でカンジョウナワを作っている間、東側の空地で宮守がオニフウジと呼ぶ歩射を行う。地面には長さ26cmの五角形の棒を立てる。棒の2面には「山の神」と墨書されている。その前に御幣（30cm）と「鬼」と墨書した紙をはさんだ割竹の棒（88cm）を立てる。さらにその前に25cmに小割した竹で作った神饌台を置き、その上に半紙を敷いて鯛2尾・飯・塩・お神酒を供える。

準備ができると、宮守は山の神の棒を拜んでからその前で弓を持って矢を東西南北・上下に1本ずつ射る。そして最後に鬼と書いた棒の的を射る。弓は長さ70cmで、割竹に藁縄を張ったものである。矢も割竹の端を少し割って紙をはさんだもので、紙に東・西・南・北・天・地と1枚に1文字ずつ墨書している。射るときは文字と同じ方向の矢を使う（天は上、地は下）。

道具は儀礼の後解体してそこに放置し、1月14日のトンドのとき燃やす。

宮守 宮守は毎年2名づつ家の順に交替でつとめ、祭祀の準備など神社の世話をする。昭和30年頃までは60才以上のものが、年令順につとめたという。

### D、白栖のカンジョウナワとオコナイ

カンジョウナワ 和東町白栖では1月9日にカンジョウナワを作って、オコナイ行事で祈祷し、集落東の道に張り渡す。

午後1時に毘沙門寺に区長と組頭（クミガシラ）が集まり、区長のあいさつの後境内の広場を使って作る。組頭は集落の村組である8つの垣内の代表である。

作業は境内の木に細縄3本を束ねたものの

一端をくくり、1人が片方を持って引っ張って延ばす。次に藁3束を束ね、根元を木にくくった細縄でくくり、3等分して1人1束ずつ持ってねじり、細縄を中心にして束を回し、1本の太縄になう。同様にして藁を継ぎ足しながら太さ直径約15cm、長さ約10mの太縄を作る。出来上がると、本堂の護摩壇の左脇にとぐろを巻くように置き、御幣をさす。

オコナイ 本堂では、カンジョウナワを作る途中から住職がオコナイの祈祷を始め、完成した縄を置いてから区長・組頭も本堂に着座し、その後護摩が焚かれる。カンジョウナワと一緒にゴーサン(牛玉宝印)も置かれるが、これは柳の枝に牛玉宝印札をさしたものである。札は住職が下記のように自筆し、印を押したものである。

(宝珠印(中央種字))

南無日光菩薩十二神諸眷属

南無毘沙門天王除疫 牛玉

南無大慈悲薬師瑠璃光如来

南無吉祥天女寿福 宝印

南無月光菩薩各各諸疫神

毘沙門寺(印「山城国

八王子社 宝亀山

毘沙門寺」)

ナカカンジョウ 祈祷の後、集落の口に掛けに行く。集落は山裾に延びる畝の丘陵斜面に垣内ごとに分散して位置している。そして集落のある山裾の下に他の地区とを結ぶ道が南北に通っており、そこから集落に向けて登る道がいくつかある。主要道路は加茂町例幣で国道163号線から分かれ、同町口畑・奥畑・和東町石寺といった山地の集落を結び、白栖を過ぎてから東に下り、府道に合流する。

カンジョウナワを掛けるのは奥畑・石寺方面の口でナカカンジョウと呼ぶ場所で、西谷の垣内へ上る道の分かれである。そこには道をはさんで樅と杉の木があり、ナワはその間に掛ける。1年間掛けたままにするが、その年に地区で最初に亡くなった人が出ると切り

落とす。地区内にはオオカンジョウという場所もあり、カンジョウという場所は取引した所だとの伝承もある。行事は掛けた後、集会所で会食をしてから終わる。

#### E、銭司のカンジョウナワ

ニシテ・ヒガシテ 加茂町銭司では1月3日に氏神春日神社でカンジョウナワを作って、神社参道口に掛ける。

銭司は西流する木津川を望む右岸斜面に集落と耕地がある。集落は大きく東西に分かれ東組・西組といい、通称はヒガシテ・ニシテという。軒数はヒガシテが23軒・ニシテが40軒である。神社は東西の集落を結ぶ道の途中で分かれる山道を登った所にある。

3日当日は東組5人・西組7人が12束ずつの稲藁を持って道を登り切った境内手前の場所に集まる。参加者は両組とも家の順に交代で出てくる。順番は「勸請縄奉仕者名簿控」に記されており、行事の後それを見て翌年の参加者名を紙に書いて社務所に張り出しておく。前年の紙ははずして名簿に綴じる。紙を見ない人もいるので年末に宮守が両組の組頭に奉仕人の名を伝え、組頭が個別に家を訪れ参加を頼んでまわる。なお不幸ごとのあった家は遠慮して翌年に出る。組頭は名簿の最初に書かれている人がつとめる。

カンジョウナワ カンジョウナワ作りはまず藁で直径約10cmの太縄をない、次に細縄で網状の下がりを作り太縄に取付ける。網には13本の榊の枝と小さい幣をさし、太縄には中央に御幣と8合の米が入った袋を下げる。

完成すると神社の太鼓を鳴らし、同じ場所の山道下り口の道両側にある木の間(7m)に道を切るように張り渡す。そしてカンジョウナワの前に参列し、白装束を着た宮守が祝詞を奏上する。その後社務所でしばらく談笑してから解散する。

行事の日は、以前は4日だったが、勤め人が多くなったので3日に変えたという。奉仕人も両組とも6人ずつだったが、ヒガシテの

軒数が減ったので変更した。計12人という人数は12ヶ月を意味するという。また材料の細縄も今は氏子総代が用意しているが、以前は1軒で12尋の縄を用意して持って行った。

山道口に綱のようにして張るのは悪魔を神社に閉じ込め、集落に下りてこさせないためだという。カンジョウナワは1年間掛けたままにするが、神社に向って右側の吊った縄が最初に切れるとヒガシテ、逆に西側だったらニシテの家に不幸があるという。

#### F、井平尾のカンジョウナワとオコナイ

堂ノ講 加茂町井平尾では、堂ノ講が1月5日に東福寺で作って、春日神社境内西側の道に掛ける。

堂ノ講は井平尾約80軒の内、42軒で組織されている。これとは別に宮ノ講という講もある(軒数は堂ノ講より少ない)。年長5人を五人衆と呼び終身である。それに入るためにトウオトナという頭役を年令順につとめる。

カンジョウナワ カンジョウナワは五人衆が餅藁を持寄って作る。作業はまず藁で長さ4m90cm、直径約13cmの太縄をない、そして下がりを作る。下がりには榊と松葉を藁縄で束ねたものを10組左右に分けて吊ったもので、それを5つ太縄に下げる。また中央にシノブ竹の弓矢の作り物を矢を上に向けて取付ける。

オコナイ 出来ると堂内の台の上にとぐろを巻くようにして置く。そして全員参列して海住山寺住職が仏前でオコナイの祈禱を営む。途中1人が外で太鼓を打つ。続いてカンジョウナワの前で読経があり、「一心祈願、村内安全、一心祈願、さいないじょうじょう」と唱える。祈禱の後、2時まで会食し、その後、神社境内に接した西側の道に持って行って、境内の木と道脇に立てた支柱との間に道を切るように張り渡す。この道は木津川の旧井平尾の浜へ出る道である。

掛ける場所は、昭和28年の水害で和東川に架かる旧菜切り橋が流れるまで、橋の手前の大木に道を切るように張り渡したという。掛

けるのも子供の役割だったという。

#### G、江津の注連縄

注連縄 京田辺市江津にある佐牙神社は江津と山本地区の氏神で、1月4日に神主と手伝い人とで注連縄2本をない拝殿と参道に張り渡す。神主は両地区ともに1名ずつ輪番に勤める

当日は朝から餅藁3束を持って神社に参集し、まず去年の注連縄をはずす(これは1月15日のトンドで燃やす)。次に2間ほどの注連縄の長さ分の番線を適当な柱等を使って張る。そして一握りの藁2束を株の部分で麻草でくくり、番線を芯にして藁を継ぎ足しながら真ん中が太くなるように左縄の太縄になう。出来たらもう1束使って先になった縄にからめて3つ縄にない、余分な髭を切る。太さは径15cmほどになる。

出来上がると1本を拝殿の前に、もう1本を参道石段の降り口の両側の木に張り渡す。そして神主が前日宮司が切った御幣4枚を各注連縄に下げる。その後、片付けして解散する。御幣は最近下げるようになったもので、以前は何も付けなかったという。

祈禱 1月6日の夕方宮司の祈禱がある。神主が参列して、宮司が祈禱を行い、竹に紙の羽を付けた矢5本を拝殿前の注連縄に突き刺す。

勧請縄 佐牙神社は両地区の宮座が運営していたが、江津は大正時代に廃絶した。山本地区は今でも存続しており、祭祀の中心となっている。神主も座役の一つで祭りの十七当役を勤めて座入りした者が座入り順につとめる。この宮座の組織、行事については小泉芳孝氏が「京都田辺町『佐牙神社』の宮座<sup>(注2)</sup>」で報告しているが、記述の中で引用した座の文書の一つに文政12年「神役記録 山本惣座中」がある。その一項に次の文がある。

##### 一、五日

勧請縄撚又官定縄被出<sup>ハ</sup>而村立合三四人手伝、藁八束縄五把宛両神主<sup>ハ</sup>出櫛之枝一貫

目御幣四本矢廿四本但し月二本之御幣は恵日寺切被申い

これによると注連縄と呼ぶ現在のものも本来勸請縄であり、櫛の枝・御幣・矢も縄に吊り下げられ、山城町涌出宮と同様なものであったことがわかる。

#### H、奥海印寺のカンジョウナワと歩射<sup>(註3)</sup>

カンジョウナワ 長岡京市奥海印寺では、1月10日に地区の役員が公民館に集まって作り、氏神走田神社に掛ける。

まず太さ約15cm・長さ約5m50cmの左縄の太縄をない、長さ約1mの下げ物を吊す。これは櫛の枝を束ねたものをスダレのように12段細縄で結び、下に御幣を一つ付けたもので、都合12本太縄に吊り下げる。12本は12ヶ月に対応した意味という。掛ける場所は参道の石段途中で、そこに2本の専用の鉄柱があり、上に渡した孟宗竹に道を切るように取付ける。

オセンド 1月13日の午後、神社でオセンドおよび歩射が行なわれる。まず本殿に氏子総代・地区役員等が参列して宮司の祈祷が行なわれ、その後走田神社奉賛会総会に続いてオセンドが行われる。総代・役員・一般氏子が並んでまず本殿を右回りに1回まわってからカンジョウナワをくぐって参道石段を下り、そこにある杉の木をまわってから戻り、そのまま本殿を9回まわる。最近は小学生も参加している。

昔は毎回石段下の杉の木を延べ1000回まわった。回数は参加者の人数で決まり、数はカズトリ役が数えた。

歩射 歩射はオセンドの後、3時頃から弓講によって行われる。奥海印寺の高橋姓6軒で構成される宮座行事で、氏子主催のオセンドとは一応別の行事である。弓講は本座と呼び、明治時代には12軒あつて輪番のトオヤには小倉神社の御神体を納めた祠を祀ったということで、かつては小倉神社の宮座であつたか。祠は今講の特定の家で保管している。<sup>(註4)</sup>

行事はまず風呂で身を清めたトオヤ2人と

講員が本殿に参列して、宮司が祈祷を行う。その後、宮司が弓矢を持って本殿前の境内に敷かれたコモの上に立ち、矢を弓につがえて順に天地東西南北方向に向け、西に置かれた的に向けて矢を2本射る。続いてトオヤ2人が弓矢を持つて的に向つて立ち交互に2本射り、左右の位置を変わつて2本射つて、再び位置を代つて2本射る。以上で歩射は終わる。

講員に関係ない厄年の人も希望すれば的を射ることができる。ただし弓はトオヤの塗のものとは別の簡素なものを使う。的はダンボールに丸を書いて板に貼つたもので氏子役員が用意する。的の左右には講員が用意した御幣2本を立てるが、昔は行事が終わつた後、参列者が奪いあつたといわれ、牛を飼つた人はそれを牛に食べさせたともいう。またオセンドの日に10日に掛けたカンジョウナワの12本櫛の下がり具合でその年の米の相場を占つたという。つまり1月相当の櫛の下がり方が大きいと1月の米の値が安い、逆に小さいと値が高いということで、それを各月ごとに占う。この占いからカンジョウナワを「勘定」縄と意味づけている。

#### I、勝竜寺のカンジョウナワ

カンジョウナワ 長岡京市勝竜寺では1月第2日曜の午前中に勝竜寺に地区の人が寄つて大小のカンジョウナワ2本を作り、本堂と境内に祀つてある春日神社に掛ける。行事に参加するのは自治会長等地区の役員、神社・寺の世話役と当番の隣組の世帯主である。隣組は1組・2組・3組・5組(4という数字を避ける)の4組あり、毎年輪番でつとめる。<sup>(註5)</sup>

カンジョウナワは本堂のものが長さ5m・太さ径15cmで、櫛の葉付きの枝と幣が付いた12本の細縄の輪が下がる(直径35cm)。一方神社のものは長さ3m・太さはそれより細いもので、6本の輪が下げられる。作業は、藁を打つてなう人や、下がりの細縄をなう人な

ど手分けして行う。藁は昔は餅藁を使ったが、今は梗を使っている。農家でない家も多く、藁は農業をやっている家からもらってくる。本堂の縄は本堂のの柱を使って左縄で、2つ編みにしてない、それをさらに2つに折って合わせるようになって、1本の左縄の太縄になう。途中3箇所撚りを太くして瘤を作る。最後に余分な髭を切って出来上がりである。輪縄の楠の葉は境内にある楠木の枝を折って利用する。

カンジョウナワは龍に見立てられ、完成すると本堂のものは向拝の下に頭を東にして掛け、神社のものは頭を北にして鳥居に掛ける。昼前には作業は終了し、後片付けをして隣接する公民館で会食する。

行事の日は、以前は本堂で祀る毘沙門天の縁日である初寅の日に行なった。戦前は村の年寄が寄って作り、組の輪番ではなかったという。また古いカンジョウナワをもらって家の改築・新築のとき壁土に混ぜる藁に使ったりした。『長岡京市史 民俗編』では、本堂毘沙門天に供えられた鏡餅を開いてぜんざいにして厄除けとして食べたと記す。

## J、竹田のエンザサンザ

エンザサンザ 京都市伏見区竹田では、カンジョウナワとは言わず、エンザサンザという行事名で呼ばれている。1月7日・8日に当屋で作って、8日の夕方に張る。

行事は、東竹田の旧丈六町9軒で行なっているが、昔は16軒あったという。当屋は持ち回りで当り、材料の餅藁などを用意する。ブク(忌服)の家は当屋をさける。本来は8日にすべて行なっていたが、軒数が減ったので2日かけて行なうようになった。農家が多かったときは材料の藁は各自が当屋に持参した。

7日は太縄を長短用に3本づつない、翌8日午前中に縄につける御幣・下がりを作り、午後、前日作った太縄を持って竹田小学校に行き、校庭にあるクスの大木を使って長さ12mの太縄と2mの太縄とをなう。最初長い太

縄3本を延ばして並べ、中央をロープでくくる。ロープの端をクスの木の幹にくくって縄を固定し、片方の縄を1本づつ適当に分かれて持ち、左縄になって一斉に縄を引っ張ってしめる。しめるときみんな「エンザサンザ、サブロウでホイ」と掛け声を掛けるが、行事名はこの掛け声からきている。半分できるともう半分も同様に3つ縄になう。短いものもない終わると当屋に戻り、適当なところに吊って、余分なヒゲを切って仕上げ、下がり等をつけていく。まず中央に薬師経の一文を記した木製のコマフダ(祈祷札)と左右に十二神将の名を1本づつ記した木札をつける。6本を一つにして下穴に竹串を通し、扇のように広げ、串先を縄に刺しシュロ縄で固定する。

綱の上には五角形の紙を竹にさした御幣12本をコマフダの左右に6本づつさす。そして下には下がりを同じく左右6本づつ、計12本下げる。下がりには長さ80cmほどの細縄4本を1つにして垂らしたもので、シキビの枝と幣を上下に付ける。数は12ヵ月を意味し、札に向って右から順に1月・2月に相当する。また閏年には13本になる。

完成したら縄をかついで掛けに行く。長いものは小学校正門前にある2本のクスの木の間、札を北向きにして掛ける。短いものは近鉄竹田駅の南の線路沿いに、竹竿2本立ててその間に札を東向きにして掛ける。線路が通るまで縄の下は西竹田に行く道であり、地下鉄工事前までは札を西向きに掛けた。

縄を掛けるとき1人が「オンコロ、オンコロ、センダリ、マトムギソワカ」と唱え、掛かると厄除けとして町内の誰彼となくくぐり初めをした。また下がり(注6)の長さで米の相場師が相場を占ったという。

修正会 安楽寿院は保延3年(1137)に鳥羽上皇が鳥羽離宮に建立した由緒ある寺で、現在は真言宗智山派である。丈六町の檀家寺ではないが、正月に行う修正会でコマフダと十二神将札を祈祷してもらう。札に使う板は

当屋が用意して規定の形に切り、年末に寺に持って行く。それを住職がコマフダに経文を記して宝印を押し、十二神将札に名と種字を記す。祈祷した札は8日の午後当屋が謝礼を持って受け取りに行き、戻って縄に付ける。

修正会は昔は薬師堂で営んだが、昭和9年の台風で堂が倒壊してからは庫裏でしている。昔は住職が薬師経など読経している途中で梅の木21本で堂内の板間を叩いた。そのとき鐘を鳴らし、その合図で堂の外にいた子供達も一斉に梅の木や竹でそれが割れるまで激しく叩いた。いわゆるこの乱声は、耳の悪い薬師さんを起こすとか、割れるまで叩けば田に虫がつかないなどの言い伝えがあった。棒は蛇避けのまじないになったともいう。

七つ塚 下がりの細縄は別に1本ずつ各家に持ち帰り、家の入り口にも下げ魔よけとする。同時に集落周辺に七つある七つ塚にも1本ずつ割り竹に挿して立てる。塚はサルツカ・クルマツカ・ナンテンツカ・ミユキノモリなどで、現在宅地化が進み、塚の形態はなくなっているが、もとの場所(注7)に立てている。

#### K、小山のニノコウ

ニノコウ 京都市山科区小山では2月9日のニノコウという行事で、トウヤを中心に龍をかたどった太縄を作って集落のある谷を流れる音羽川の川べりに掛ける。ここもカンジョウナワとは呼ばない。トウヤは2人で、宮総代が後を継いだ戸主に頼みに行つてつとめてもらう。旧在所の家だけでなく、戦後移り住んだ家の人もつとめてもらっている。ちなみにこの日は山の神が里に種蒔きに来る日だという。

行事は、朝1人のトウヤの家にトウヤ2人・翌年のトウヤ2人・宮総代・トウヤの親戚が集まって手分けして縄を作る。まず龍の頭から作る。縄の太さ分の藁を束ねて中央をひもでくくり、株の方を上下2つに割って(頭と口)それぞれを4つの束にさらに分け各束をつなぐようにヒモで結び扇を広げたような

形にする。次に中央でくくったひもを横木にくくり、穂の方を3つに割って一人ずつ持ち藁を擦ってから3人同時に回転して1本にする。同様に藁を継ぎ足しながらなつて行き、全長12.3m、太さ20cmほどの3つ縄の太縄にする。できたら孟宗竹に巻き付け、頭にダイダイの目を2つと、口に1本の細縄の舌をつけ、口の中をスプレーで真赤に塗る。次に竹には12本の下がりを下げるが、これは竹輪に松葉と幣が2つずつ付いた細縄3本を下げたものである。

完成すると、お神酒・洗米・塩など供え、音羽川上流の牛尾山中腹にある修験宗法厳寺住職が読経して祈祷する。そして龍の口に酒を注ぎ、トウヤが玉串を奉納する。平成の始めごろまでは氏神の白石神社宮司が祈祷した。酒も甘酒だったという。

午後、かついで集落北西の谷口にあたる音羽川の川岸に持って行き、松と杉の木の間(4m)に掛ける。そしてお供えをしてから住職が再び祈祷し、終わるとトウヤに戻つて会食をする。午前中縄が完成したとき、3人が下がり1つを持って集落東南はずれの川岸に掛けに行く。これは死んだ馬の霊が現われないようにという願いからだという。

#### L、大原のカンジョウナワ

ハナジリノモリ 京都市左京区大原にも2カ所カンジョウナワの行事をするところがある。一つは大原上野町、もう一つが大原野村町である。大原の谷間が開ける国道367号線の高野川の橋の東側にハナジリノモリと呼ぶところがある。ここに1月10日の午前中カンジョウナワを作って掛ける。この行事を行うのは上野町約13軒・野村町約15軒ほどの家で、朝当屋に集まって作る。長さ2m30cm、太さ14cmの左縄の稲藁の太縄に8つの下がり掛ける。下がり細縄で作った輪を2つ連ねたもので、各輪には2本ずつシキビの枝を上下2段に縄の間に突き刺す。

ハナジリノモリは江文神社の御旅所で、1



本の大木の根元に祠がある。カンジョウナワは御旅所入口の鳥居の後にある2本の樁の木に張り渡す。太縄の上に下がり輪をつないだ部分を中心に掛ける。そして神饌を供え、拝む。そして、すぐ神饌を片付け当屋に戻り会食する。当屋は輪番で両町が隔年で勤める。

オツウノモリ もう一つのカンジョウナワを掛ける場所はオツウノモリと呼ぶところで、ここには3月10日に掛けられる。行事にかかわるのは野村町の約15軒で、ハナジリノモリの家は含まない。行事は午後当屋に各家の当主が羽織・袴姿で正装して集まり、カンジョウナワを作る。2束の藁を束ねて株の方を細縄でくくり、縄の端を家の軒の梁などに掛ける。そして2束に割って1人づつが持ち、右縄にひねり次に2束を合わせるように左縄にない1本の縄にする。同様に藁を継ぎ足しながら長さ2m太さ10cmの太縄をなっていく。藁を足すとき端は少し髭のように出し、最後にはさみできれいに整える。下がりにはハナジリノモリと基本的に同じだが、全体の数が12本で、輪のシキビの枝の数も2段とも2本づつさす。最後に龍の顔を墨書した半紙を縄の端にひもで取付けて完成する。

出来たら、太縄と下がりそれぞれ竹の棒に下げ2人がかつぎ、全員で掛けに行く。オツウノモリは集落から北に少し外れた寂光院のある大原草生町の谷口で高野川支流由多川近くにある。カンジョウナワを掛ける2つのモリはオツウという娘が変身した大蛇を退治して埋めた場所で、ハナジリには頭を、オツウにはシツポを埋めたと云われている。

オツウノモリには樹木が植えられ、「龍王大明神」と刻まれた石碑が祀られている。石碑の横には五輪塔の残石と、前に石灯笼が1対立っている。カンジョウナワは灯笼の前の2本の木の間で龍の頭を東にして張り渡し、それにシキビの下がり掛ける。石碑の前には塩・洗米など供え、灯笼にローソクで火を灯す。準備が出来ると当屋が石碑の前に、他

がカンジョウナワの外に座って拝む。その後は当屋に戻り会食する。

当屋は1年間、屋敷の入口に注連縄を張り御神体を入れた木箱を座敷の天井片隅に祀る。

#### まとめ

最後にまとめにかえて今後の課題について記しておきたい。

カンジョウナワの分布 今回の報告から、行事の行なわれている範囲が相楽郡の山間地及び乙訓・山科・大原と京都周辺の山麓・山間地へと広がった。しかし、逆に旧巨椋池を中心とした盆地中心には伝承されていないことが鮮明になり、この行事が山城地方全体に渡って行なわれていた行事であるとまではまだいえない状況である。この地域はカンジョウナワ以外にもオコナイ・御田などムラ全体で行なう年頭の予祝儀礼の伝承が希薄な地域である。カンジョウナワ行事がないのは境界意識の差の問題もあるが、<sup>(注8)</sup>伝承母体としての各ムラの固有の歴史的な有様の問題がからむと思われ、今後の丹念な調査を必要とする。

カンジョウナワ カンジョウナワのまづ物としての形態は、太縄は基本的に三つ編みの左縄で、簡略化され2つ縄になったり、細くなっている。また材料も長い餅藁から、餅米を作らなくなつて粳米の短い藁に変わってきている。カンジョウナワの見る上で問題なのは太縄に下げる下げ物である。圧倒的に多いのが榊・檜・松などの枝葉で、スダレ状に下げた細縄に付ける形態にも基本的共通性がある。中世の絵巻などを見ると、屋敷の門あるいは建物の軒に縄を張って枝葉を吊っているのを見ることができ<sup>(注10)</sup>。そのことからカンジョウナワは本来常緑の枝を疫鬼退散など除災の呪物として下げることに淵源することが考えられ、枝葉の意味とともに課題として残る。

張る場所からカンジョウナワの性格を見た場合、村境は村内への疫鬼の侵入防止の意味と分かる。しかし約半数の神社に張る事例に

については、オコナイ等の祈祷で神仏を勧請した祭場の結界及び疫鬼などを封じ込める意味とが考えられる。前者については涌出宮・山田・菅井の事例がある。後者は銭司がはつきりとその意味合いを持っている。他にも大原では龍蛇を封じたモリ（祭場）を鎮める意味があると思われ、そのことは竹田や小山で細縄を霊を封じた塚などに供えることから推測される。さらに白栖のようにおそらく死穢が籠もるのでカンジョウナワを切ることから逆に縄が内なるものを封じ込める意味を持つことがわかる。

オコナイと山の神 行事は現在独自の行事として行なわれているが、中野豊任氏は滋賀・奈良の事例から修正会等正月の祈祷の中の行事であると考察している<sup>(注11)</sup>。山城でも先に報告したように野殿・白栖・井平尾・竹田では大般若会・オコナイといった正月の祈祷に関連して作られている。

次にカンジョウナワを龍蛇に見立てる事例は各地で散見する。古来龍蛇は山の神の化身と見る場合が多い。当地方でも平尾・勝竜寺・小山がカンジョウナワを龍に見立てており、大原は龍を鎮めた場所を祭場としている。そして小山では行事の日に山の神が種蒔きに降りるとの伝承があり、山の神祭祀としての性格がある。他有市では山の神の祭場に掛け、飛鳥路でも当日山の神を祭神として歩射を行う。ムラの年頭の儀礼は御田に見るように稲の順調な生育と豊作を祈願としており、稲作地帯での龍蛇・山の神祭祀も同様の祈願から行なわれることは全国各地の豊富な事例でよく知られている。

カンジョウナワを中心に見た場合、本来山の神の祭場の結界物であったものが山の神そのものと見立てられて行き、造形も蛇をかたどるものへと変化する過程が想像される。これについても現在調査中の南山城のオコナイ調査の報告の中であらためて触れてみたい。

(1) 『山城郷土資料館報』第3号、1985

(2) 『京都民俗』第8号、1990

(3) 長岡京市のカンジョウナワについては『長岡京市史 民俗編』（長岡京市、1992）にその記述がある。

(4) 井上頼寿『京都古習志』地人書館、1943

(5) 『京都古習志』には、明治初年まで春日神社に巽座・乾座・坤座・艮座の四座があつたことが記され、座の行事の可能性がある。

(6) 『城南－鳥羽離宮址を中心とする－』（城南宮、1967）の記述による。唱えごとは薬師如来の真言「オンコロコロ、センダギ、マトウギソワカ」であろう。

(7) 報告として、松木操「二九（にのこう）の行事について」『協会だより』第5号、京都S K Y観光ガイド協会がある。

(8) 印南敏秀氏は「村落の境界呪物」（『民俗文化分布圏論』1993）で、山城山間のカンジョウナワ行事と平野の野神行事の分布差から平野部には元来カンジョウナワ行事はなかったと推測している。

(9) 「村境の祈祷札と山城地方の境界意識」『山城郷土資料館報』第13号、1995

(10) 『一遍上人絵詞伝』日本絵巻大成別巻（中央公論社 1978）・『法念上人絵伝』上（続日本の絵巻1 中央公論社1990）等

(11) 『祝儀・吉書・呪符』吉川弘文館 1988  
[付記]

井平尾春日神社・宮津佐牙神社・勝竜寺春日神社のカンジョウナワについては京都府文化財保護課の原田三寿氏の調査協力を得た。また大原・小山のカンジョウナワについても京都市文化財保護課の青山淳二氏から情報提供等の協力を得た。調査でお世話になった地元の方々と合わせてお礼申し上げたい。